

# 志賀直哉における父子対立の問題- 『或る男,其姉の死』を中心に-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/1160">http://hdl.handle.net/10291/1160</a>

## 志賀直哉における父子対立の問題

——『或る男、其姉の死』を中心に——

宮 越 勉

### はじめに

人それぞれにその青春期で重きをなすものは異なる。志賀直哉の場合のそれは、父直温との長年にわたる不和対立であった。このことを抜きにして彼の文学は語れない。ではその父子対立の原因と実情、および経過はいかなるものであったのか。

このような問題について論じようとするなら、『或る男、其姉の死』(大9・1・6～3・28、「大阪毎日新聞」夕刊に連載)が有力な手がかりとなる。作者志賀に次のような自注があるからだ。

この小説は「和解」といふ小説と対になる作品で、「和解」では和解を主に書き、不和の事実は殆ど書かなかつたが、これでは寧ろ不和を主にし、丹念にその

原因を追及して書いたつもりである。

(細川書店版『或る男、其姉の死』あとがき、昭21・12)  
ここに『或る男、其姉の死』をじっくり読み込むことが要請される。だが無論のこと、この作品はあくまで小説として存在する。当然そこには作者が意識的に避けて通ったものや、逆に無意識のうちに作品の底部に流し込んでしまったものがあるだろう。こうした側面には細心の注意を払わねばならない。

とはいえ、『或る男、其姉の死』一篇でトータルな志賀父子対立の問題に対応できるものではない。より視野の広い実際面へのアプローチが必要である。幸い今日では、膨大な各種草稿、未定稿類などが残されている。これらの資料を有効に役立てねばならない。

本稿は、以上のような前提のもとに、志賀の父子対立

に関連する諸問題について論じることを目的とする。

(一)

『或る男、其姉の死』における作品構成のあり方は多分に混み入っている。事件、出来事の時間的推移が順を追って叙述されないばかりか、途中主人公芳行の姉あて書簡が長く引用され、語り手私（主人公の異母弟）の視点の統一という点でもいささか破綻をきたしている。このような事態はいかなる所から生じたのか。

その一因として、本来短篇むきである志賀の作家的資質の関与が考えられる。

ディテールは解してもホールを理解する力が弱い（明44・1・10の日記）とする直哉は、その初期から作品制作にあたって、視座の一元化を計り、自己の実感優先という方法でかなりの成功をおさめてきた。しかるに父との和解成立（大6・8）後において、父との不和を自分の側（主人公芳行の視点）から一方的に描くことは出来ない。客観的な第三者の設定が必要となり、それに付随して実感優先の一人称的小説の形成も困難となった。このことは志賀をして随分苦慮せしめたに相違ない。だから、後年の志賀はこの作品について、骨を折った割に評判になることの少なかった、いわば不遇の作として述懐

するに及んだのだと思う（細川書店版『或る男、其姉の死』の「あとがき」など）

しかし、このような制約の間隙をぬい、志賀は自己の作家的特長を生かそうとした。ここでその当否は問わぬが、まず第一に、ディテールを生かす算段として内容上いくつかのブロックに分け、その描写の牙えを出そうと努めた。さらにまた、実感優先のため敢えて視点の統一を破り、それまでいわばガラス越しに見えていた存在の芳行をクロースアップさせる（姉あての手紙）こともした。このように解釈すると、その構成上の複雑さの淵源が幾分理解できるように思う。

ともあれ、『或る男、其姉の死』では、先行の中篇『大津順吉』（大1・9「中央公論」）、『和解』（大6・10「黒潮」）と同工異曲といえるブロック構成法が採択されている。そこでその大雑把な分類を行えば次のようになる。

Aブロック・一節～四節前半、および三十四節後半～四十節

Bブロック・四節後半～十六節

Cブロック・十七節～三十四節前半

Aブロックは、今（小説の現在時点）から五年前の姉臨終の場が中心となる。そしてこのブロックは、父と兄

との不和を語った部分を包み込むようにして形成されている。その相互関連性をどのようにみたらいいか。これは『或る男、其姉の死』の主題把握の上で大きなポイントとなるだろう。

書き出しの一、二節は、Aブロックを考察する上で極めて重要な意味を持つ。語り手の私は信州のとある寒村で寂しく死んでいこうとする姉のもとに赴く。その途次、この時点よりさらに九年前に家を出、消息不明となっていた兄芳行と再会した。ここで注意すべきは、芳行がその姉の危篤を人づてに聞いてやって来たとは思えない、と叙述されることである。

若し想像が許されるなら、丁度ベツレヘムの星に導かれた東方の学者たちのやうに何百里をへだてた所から兄は何かに導かれて、トボ／＼と其処へやつて来たのではないかと思はれるのです。

これは同腹の姉弟の血縁の強さ、愛情の確かさを神秘的な次元で語ったものといえよう。奇しくも、『焚火』(大9・4「改造」)におけるKさんとその母との魂の交信、テレビシュー発現現象とみあっている。ここで作者は何を言わんとしたのか。姉設定の意味とともに考察してみねばならぬ問題である。

以上のような問題の究明については後述するとして、

Aブロック前半部(一節～四節前半)は、B、Cブロック展開の予告という役割も果たしていたようだ。三節冒頭の次のような叙述部に注目してほしい。

実際兄も若し父がもう少し愛情を持ち、兄のしたい仕事に寛大であり得たら、あれ程にならずに済んだらうと私にも考へられるのです。然しそれが直接に兄をああまでしたのではなかつたのです。……(中略)……兎に角兄は現在の自身が厭で／＼ならなくなつたのでした。……(中略)……精しくは後で云ひますが、だから、祖母が、父との関係にだけ兄の家出を帰してゐるのは誤解なのです。(傍点筆者)

このような文脈から、父と兄との不和対立をみるに際し、二段階の設定を行う必要性が生じる。すなわち、兄が家出に至る経緯として、父が兄に愛情を寄せ、その仕事にも寛大であつたらとする段階と、父との関係を第一義とせず、兄を直接的に家出へと導いていった兄自身の自己嫌悪という段階との二分化である。これが私のいうBブロック、Cブロックに他ならない。

Bブロックは、兄の小豆島行きに至るまでの時間帯で、父と兄との衝突の具体例がいくつか取り上げられている。だが、その時間的経過については多分に無造作な叙述の仕方となっている。そこで便宜上、時間的経過の

順に整理しなおしてみると、この作業が必要とならう。それは志賀における父との衝突の経過と照応、対比させる上で大切なこととなる。直哉は小説の小豆島行きに当たる尾道行き(大1・11)以前までの時期において、果たして父に愛を求め、また自分のしようとする文学の仕事に父の寛容を期待していたかどうか。この点に關してはその實際面に立ち入り、志賀初期のいくつかの資料からその検証に努めたいと思う。

Cブロックは、Bブロックと明らかにその性質を異にしている。作者は十七節冒頭でそれまでの出来事を整理した年表を掲げた。何故このような中仕切りを行い、兄の小豆島生活以降、家出までの経過を綴っていくこととなったのか。おそらく小豆島生活以前と以後とでは問題の質を異にするという認識が作者にあったためだと思う。

果たせるかな、このCブロックでは父と兄との直接の衝突は全く起こらない。ただ、兄の父に対する憎悪、反感の情が揺曳しているのみである。

このような傾向から、尾道生活を経た直哉に、その生活意識の変化を見立てることが可能であろう。

なお、Cブロックはさらに三つの小ブロックに分けてみる事ができる。赤城山での怪我のこと、結婚話が二

度に渡って頓挫したこと、姉あての手紙の部分、というふうに分けられるのだ。それはちょうど志賀の大正二年から三年にかけての出来事と照応する。直哉はこの時期、自己嫌悪に陥ったことから家出を断行したのか。またもしそうなら、自己のいかなる点に我慢できなかったのか。それらの究明に努めねばならない。ただこのブロックでは、芳行と直哉との共通点をみるばかりではなく、その相違点の抽出にも留意したい。

以上で『或る男、其姉の死』の作品構成のおおまかな把握、および三ブロックに分けたそれぞれの問題提起をなした。小説の時間的経過に即し、これら三ブロック(B、C、Aの順)の考察に及びたい。

## (二)

Bブロックでは父と兄との衝突がいくつか描かれる。まずはその記録をなるたけ年代順になるようまとめ直してみた。

①兄十八歳の折、W川沿岸の鉱毒地視察をめぐって父と激しい衝突をする(十、十一節)。当時語り手は八歳でこの出来事に関する記憶はなく、「母の話」をもとに叙述したとされる。直哉十九歳(数え年計算・以下の記述もこれに従う)の明治三十四年のことであ

る。

②兄、ある年の夏休みに友だちと奈良京都旅行に行きたいとして、その旅費をめぐり父と衝突する(四、五節)。これは「私の覚えてある最初の衝突」と明記されているので、こういう比較的早い時期のものとして位置づけざるを得ない。直哉に即せば、明治四十一年春の木下利玄、里見淳との奈良を中心とする関西旅行の際、もしくは明治四十五年春の京都行の際と思われるが、いずれも確証はない。ただ素材がいつのものにせよ、また小説上で祖父存命中といえども、父にこの家での経済上の実権がありとすれば、ほぼ抵抗なく読めるところである。

③これもいまだ祖父存命中のことと受けとれるが、兄は「シエクスピアの五十円程するケムブリッジ版」の購入をめぐり父と口論する(十二節)。この出来事のあと兄は、司馬温公の家訓の一節を記した掛軸を見ながら、「積金はお父さんだ。積書は俺だ」と語り手私に言って笑っていた。が、この掛軸は祖父の死後まもなく「何所かへ見えなくなつて了」つたという。

④祖父が死んだその年の夏のこと、兄は大学の制服仕立てに関し父と衝突する。兄二十二歳の時である

(十三節)。なおこの時、「私は二人の間に入つて、無理に兄を兄の部屋に引張つて来て了ひました」という。だから、この出来事は②③よりあととしなければならぬ。ちなみに直哉二十四歳、明治三十九年夏のこと素材となっている。

⑤兄二十三歳の夏、自家の女中との結婚問題で父と衝突する。が小説では、そのごたごたの最中の季節は秋、父の会社の賞与金分配法に不平でやって来た男との交渉が主に描かれる(十四、十五、十六節)。直哉に即せば、二十五歳、明治四十年のこととなる。

⑥兄二十五歳、短篇集出版の費用をめぐって父と衝突し、これを引き金に兄の「自活」への挑戦、小豆島行きとなる(八、九節)。直哉の場合は三十歳時の明治四十五年である。そこで、志賀の明治四十一年から四十四年までの四年間は、小説では「二十四歳、大学中途退学、此時案外衝突なし。」(十七節)という一年間に圧縮された形となる。

さて、以上のような父子衝突の具体例において何をポイントとすべきか。問題の引き出し方はいく通りかある。例えば、①⑤のエピソードを重視すれば、直哉の社会性の欠如に通じ、志賀文学の限界を突くことになる。<sup>(1)</sup>だがおそらく作者の執筆モチーフに添う見方は次のよう

になるだろう。

母を八歳にして失っていた兄（直哉の場合は十三歳）

は、「父からの愛情の印」（八節）を見たかったのであり、それが「求めて得られ」ず、「やりきれない気分」が「変な現れ方」（七節）をし、次第に父との関係はこじれていった。この「父からの愛情」とは範圍を広げていえば、兄が文学の仕事に対し父からの許容を得たいと願ったことにも通じる。先に示した②③④⑥のエピソードが直接これに関わってくる。殊に、父から「全体俺は貴様のしようにと云ふ仕事が入らないのだ。」（五節・②）と言われたり、「全体貴様は小説なぞを書いて居て将来どうする心算だ」（八節・⑥）と言われたりした時、兄芳行は自分に対する父の愛情不足を痛切に感じ、父への反感を募らせたに相違ない。

このように解せば、直哉の父直温に求める愛情に、自己の進みたい道（文学）への寛容、さらに突っ込んでいえば経済上での支援までが含まれていたことになるだろう。だが、父は子に妥協せず、その切り札として「自活」を迫るのであった。進藤純孝氏がすでに指摘するよう、文学などという虚業にうつつをぬかず息子を持つた実業家の父は「世間智」の代表として子の前に立ちふさがり、子はあくまでもおのれのしたいことを貫き通そ

うとする「まことに逞しい息子」としてそれに対峙するという関係図式になるのである。<sup>(2)</sup>

これらBブロックに描かれた父子衝突の諸様相は、實際上のそれをかなり正確に伝えていると思う。そこでしばし直哉に即しこれを検証してみたい。

### (三)

明治三十四年の渡良瀬川沿岸鉾毒地視察をめぐっての父との衝突以降、祖父直道の死（明治39・1）までの期間における直哉の対父親観はいかなるものであったか。ここでは未定稿3「脚雪雄」（明治37年7月8、9日執筆）および未定稿17「脚悪魔歌」（明治39年6月26日執筆、ただしその構想はすでに明治37年に成立していた）を中心に探ってみたい。

「雪雄」が志賀の父子対立の問題を考える上で見逃せないものであることはすでに池内輝雄氏によって指摘されている。<sup>(3)</sup>池内氏の見解はのちに触れるとして、「雪雄」執筆の過程、その内容を紹介することから始めたい。

「雪雄」の落想は明治三十七年六月二十六日の夕方とされるが、その日の日記は次のようになっている。

此夜る此間の作文と、Evol序幕々切れを合せて二幕物の学校ドラマを想案す、

ここで「此間の作文」とあるのは、同年六月九日の次のような日記記事にみあうものと想定できる。

朝少し遅く登校せしが作文は何んでもいゝとのりて Eyoif の死とごふをかゝんとせしが、一時間半ばかりにてはとて出来ず、此子が怪我せし迄で書きて出せり……

以上のような二つの記述から、イブセンの『小さいエヨルフ』<sup>(4)</sup>を粉本として、第一幕を雪雄の怪我を中心に、第二幕を雪雄の溺死までとする構想が成立したことがつかめる。

残された「雪雄」は一幕物となっている。

第一場は、海軍士官志望の九歳になる少年雪雄が、アームチェアから落ちて右足を折り、不具となるさまが中心に描かれる。このような場面形成は直接『小さいエヨルフ』にないことから、志賀の創意によるとしていいだろう。

だが、第二場のプロットは『小さいエヨルフ』第一幕に負うところ大である。地主兼文学者である父久方は、その弟で海軍大尉の久義（直哉の叔父直方をモデルにしていよう）を相手に雪雄の教育方針を次のように語る。まず、母を失っている雪雄のために「マア私し一人であれの両親にならうといふのだ」として、これまでの自己

中心の生活を改め、おのれのすべてを雪雄一人に注ごうという決意を述べる。さらにまた、雪雄に不治の不具者となったことを今語るのは二重の苦しみを与えることだとして偽ってきたのを反省し、海軍士官志望を断念させ、「信仰とそれからあれの嗜好のがわから一つ得意を手へたい」という今後の具体的な方策を吐露する。これらは『小さいエヨルフ』で、自己の著述生活のためばかりに生きてきたアルフレッド・アルメルス（地主兼著述家）が、これからエヨルフのために生きるのだと妻のリタ（むろんエヨルフの母）、妹のアスタに語るのとはば照応している。

しかし『小さいエヨルフ』（全三幕）は、アルメルスが息子エヨルフを失った（海で溺死する）あと、失意のうちにも妻リタの意向に同意し、村の貧しい子供たちのためにその所有する「金と緑の森」を役立てようと決意するに至っている。個我の生から社会性を自覚した生への移行を暗示しているといえよう。ここに、『小さいエヨルフ』と「雪雄」とでは、多分にその主題、執筆動機を異にしているといわねばならない。

「雪雄」ではその父親像が極めて印象的である。父久方は、母を失っている雪雄のために、その母の分までもの愛情を注ぎたいという。また、雪雄の「得意」を文学



方面に見定め、それを伸長させてやろうとする。

志賀がこのような父親像を形象化したことは、池内氏がいうように「父に愛を希求する直哉の潜在意識のあらわれ」とみていい。別言すれば、現実で満たされない父への要求を文学の上で夢見たといえる。

では、当時の直哉における現実とはいかなるものであったのか。まずは『大津順吉』の次のような叙述部に注目したい。

「貴様は大学を出たら必ず自活して呉れ。ええ？」

これは貴様を一個の紳士と見て堅く約束して置くからナ」

私が学習院の高等科になった頃から、将来の話の出る度々に父は決してこれを云ひ忘れなかつた。

直哉の学習院高等科進学は明治三十六年である。この頃より、父直温は直哉を世間的に鍛えようとしていたのである。

また、直哉がいつ頃から文学に志したかは断定しかねるが、『書き初めた頃』（昭23）というエッセイに、「自分が文学をやる気になつたのは明治三十七年頃ではないかと思ふ。はつきり決心したのはそれから二三年后かも知れない。」という一節がみられる。

以上のようなことから、直哉の現実としては、父が自

分の将来進みたい道（文学）への障壁として立ちふさがりつつあったといえよう。そういう背景を踏まえれば、「雪雄」に託された直哉の父に対する願望、夢想がより鮮明なものとして映じてくるはずである。

ともあれ、「雪雄」に形象化された理想的な父親像からして、直哉はその文学出発期当初から父の存在を度外視できなかった、いやむしろ大いに意識していたという実情が捉えられるのである。

「雪雄」執筆の直後、同じく脚本の「悪魔凱歌」が構想された。このことは明治三十七年九月三十日の日記に明らかである。

此夜も柳沢より電話にて雪雄に今一幕賑はしき、幕を付けてくれとの事に、色々考へしが名案もなく、トルストイの悪魔の勝利を脚色してやらば一寸面白さうにて場割だけして見る、……（以下略）……

「悪魔凱歌」はその約二年後に執筆される。しかしそれは、トルストイの民話『小さい悪魔がパンぎれのつぐないをした話』およびその上演用の改作である戯曲『最初の酒つくり』（全六幕）を種本とし、多少の潤色はあるものの、そのプロット、テーマをほぼ踏襲している。このことから、その構想のなった明治三十七年時にウェートを置いて考えた方がよさそうだ。しかも、原作の読後

感が鮮明な時期に次のような父との衝突が起こっているのである。

トルストイの *The Crust of Bread* を読む 富は *Temptation* に対する力を弱める「甚だしといふ比喩なり

(明37・8・8、志賀日記)

此夜直方氏に贈るべきものゝ事にて父怒り、総ての点に於て其まゝ *the crust of Bread* を見事 *devil* 等の為に奪はれ余り口惜く一時間余りも泣きたりしが *Bible* を読みて漸く希望に復す、

(明37・9・6、志賀日記)

注記すれば「*The Crust of Bread*」は『小さい悪魔がパンぎれのつくないをした話』を指しているはずである。では、この九月六日において直哉は父のいかなる点に「口惜く」思い、「一時間余りも泣く」という仕儀になったのか。その究明の前提として、労をいとわず「悪魔凱歌」(全三幕)の内容を紹介したい。

水呑み百姓の由蔵を「人を呪ひ、疑ひの罪」に落とさせようと悪魔のデビ八、阿久介の兩名は、由蔵の働いているすきに彼の弁当を盗んだ。しかし、由蔵は盗人を呪わず、反対にその人の健康を願った。当然、兩名は魔王に勘当される。二幕目はその三年後のこととなる。その

間、デビ八と阿久介は由蔵の下男としてはいり込み、世間が二年つづきの大凶作であったのを彼の所だけ「豪い豊年」にしてやっていた。今や由蔵は「一足飛びの分限者」となっている。がここでは、由蔵が自家製ウィスキーを客人たちに振舞ううち、お世辞の言い合い、お互いの罵り合い、果ては立ち回りとなるさまが描かれる。最早由蔵は弁当(パンぎれ)を惜しまなかった頃の人ではない。こういう光景を見て喜ぶ魔王にその成功の秘訣を尋ねられたデビ八は、「此男に必要以上の富を与へてやった」こと、この男が「少しも金のつかひ方は知らないのが付け目だったと答える。こうして兩名はその功をたたえられ、副将に取り立てられた。

以上のような「悪魔凱歌」がトルストイの原作に即応していることはすでに述べたが、そのポイントは何かといえは、△悪▽ではなくむしろ△富▽にある。必要以上の△富▽、その使い方を知らぬ者は△悪▽の誘惑に陥りやすいということを教訓的に語っている。

そこで先の九月六日夜の父子衝突に戻ってみる。直方の出征(明37・9・7)に際し、直哉は何らかの贈り物を考え、それを父に申し出たと推察される。しかし、父はおそらく贅沢だとか何とか言って反対したに相違ない。その折の父は直哉にとって、今やパン切れを惜しむよう

になった由蔵、悪魔たちに敗北した人間、△富▽の使い方を少しも知らぬ者と映ったはずである。池内氏は、九月六日の日記から、直哉が「父」を「devil」に見立てていたと解しているようだが、それでは「devil等」の説明がつかない。ここは、直方出征に際しての贈品をめぐり、直哉は、父直温を△富▽の使い方(5)の知らぬ朴念仁と感じたところから「口惜く」思い、涙を流すことになったとすべきではなかるうか。

ところで、以上のような二つの習作脚本から、いかなる事柄が指摘しうるか。「雪雄」に描かれた父親は直哉の理想であり、しかもその人は△富▽の使い方(5)も知っていたといえよう。これと対照的に、「悪魔凱歌」の由蔵は△富▽の使い方(5)を少しも知らぬ軽蔑すべき人となる。そして父直温はこういう由蔵に擬せられもしたのだ。つまり、直哉の対父親観には、早い時期から△富▽の問題が付随していたといえるのである。

しかしながらこの時期、直哉の父親観がその後者で決し切れていたわけではあるまい。願わくは前者のような父に我が父も近づいてほしい、そういう直哉の胸のうちを窺えるように思う。

#### (四)

父親からの愛情を期待する直哉という観点に立つ時、『真鶴』(大9・9「中央公論」)の草稿である『小清兵衛(梗概)』(明治42年12月22日執筆)に言及せぬわけにはいかない。この草稿はつい先頃、木下利玄家から発見され、紅野敏郎氏によって公開された。(6)その概略は次のようなものである。

清兵衛は光村の漁家の長男で十二歳、下に妹二人、第一人がいる。三年ほど前に尋常小学校を出、今は父(「親ち」と表記)と一緒に海の仕事にも出ていた。その年の年末、上の妹のお時が「ゴムまりが欲しい」と言い出したが泣き寝入りで、その後今度は下駄が欲しいと頑張る。父はそれを承知し、「そんなら清兵衛のも、庄吉のも、お六のも一緒に買へ」と言つて五十銭を出した。母がそれに十銭を加え、清兵衛に小田原までの買物を言い付けるが、弟の庄吉がそれに同行することとなった。小田原で無事下駄を買い、その帰途、法界節の一行に出会つて、二十二歳の月琴を弾いている女に清兵衛が初恋を感じるという経過を辿る。

ここで私が特に注目したいのは清兵衛の△親ち▽像である。気前よく子供たち全員の下駄購入の代金を出し、

さらに清兵衛・庄吉兄弟の帰りが遅いのを心配して「提灯をつけて迎ひに来た」のも他ならぬこの「親ぢ」であった。たいそう子思いなのである。

それが『真鶴』では、こういう父親は後退し、兄弟を出迎えたのも母親と改変される。また、妹たちは完全に捨象された。

ここで『真鶴』への昇華の過程をみるつもりはない。特筆したいのは、草稿「清兵衛」における好ましい父親像の造型、および清兵衛を取り巻く家族構成や下駄購買の経緯に注目する時、大学制服の仕立てをめぐって父と衝突した明治三十九年のあの出来事が連想されるということである。父が妹たちの夏服をその「蟲眞にしてある」洋服屋で作らせていたので、直哉も大学の制服仕立てを同じ店にたのむことにした。そうしたら父は贅沢だといって怒ったという一件である。この時の直哉の父に対する憤慨には、次のような心理がからんでいたと思う。それは、祖父の死後、志賀家の主導権が父―義母―異母弟妹ラインへと完全に移り、自分が除け者にされるという不安、焦慮の念に相違あるまい。

右のように解せば、直哉の父に対する願いが浮かびあがってくる。つまり、子供たちには公平であってほしいという注文である。「清兵衛」執筆の背景にはこう

いう願望も託されていたとしたい。

しかるに「清兵衛」執筆からわずか一ト月後のこと、直哉には父との和解が訪れた。それは明治四十三年一月二十四日の志賀日記の内容（須藤松雄氏は『原「和解」と名づけている）を指す。引用は差し控えるが、ここで父は直哉に独立心を要求するものの、経済上での面倒は一切引き受けるというのだ。そしてやがて父子ともども感涙するに及んでいる。明治四十三年四月には「白樺」が公刊され、志賀作品も次々に発表されていくが、その当初、父への反感をこめた作品が全くといっていいほど見あたらないのも故なしとはしないのである。また『或る男、其姉の死』で、「大学中途退学」にもかかわらず、「此時案外衝突なし」とされる兄二十四歳時の見えざる由来もつかめるように思う。

だが、明治四十五年頃から直哉と父との関係は再び悪化の兆しをみせていく。これは以前論じたことであるが、明治四十五年、尾道行直前の時期における直哉は、「自家の財産」が「自分を下らぬ事で束縛しない――その自由を与へてくれる」（四月七日の項）ものとして感謝し、仕事（文学）への意欲を大にかきたてていた。それは「自家の財産」を頼みとして、文学一本道へと邁進しようとする目論見とみていい。ここにかつて「雪雄」

に託した夢想の実現化が近づいたともいえるだろう。ところがそううまく事は運ばなかった。

『或る男、其姉の死』から、主人公が何故小豆島行きという「自活」を行うに至ったかは十分に読み取れる。芳行は短篇集の自費出版費用を父に出してもらう承諾を得ていた（八節）。にもかかわらずそれが急遽、「全体費は小説なぞを書いて居て将来どうする心算だ」と言われ、「自活」を迫られたのである。父としては、子への譲歩、歩み寄りを一気に翻す形で、その「世間智」をふりかざしたといえよう。こうして芳行は「自活」の試練に挑むこととなった。

こういう経過は志賀日記大正元年十月二十三、四日の項と照応している。直哉の尾道行の事情も小説に描かれたものとはほぼ同様であったとしていいのである。

### (五)

Cブロックの考察に入る。

まず、Bブロックとの関連性、いかなる点でつながっているかを考えてみよう。

Bブロックで時間的に最終のものは八、九節である。そこでこれとCブロック冒頭の十七節とを直結させて読んでみると、芳行の「自活」の問題がクローズアップさ

れてくる。

八節で芳行は父に「自活」を迫られ、その試練に挑むこととなった。十七節では芳行の長篇小説執筆が語られ、「それが書上げられれば一年か一年半の生活費は得られるわけだつた」とされる。ここに文学の仕事による「自活」、経済的独立をも企図するそれが目指されたのだ。とはいっても、自分に「自活」の能力があることを父に示すのが第一で、向後八家Vと断絶して生きるままで考えていなかったであろう。その点、父との張り合いから生じた一時的な別居としてその小豆島生活が捉えられる。

だから、その長篇の中絶、すなわち「自活」の失敗は主人公にとって大打撃となったはずである。このことがのちの自己嫌悪、気弱さ、暗さの原因となったであろうことは容易に考えられる。

以上のことから、この作品は主人公の経済的な問題に決して無頓着でなかったといえる。しかし、そういう関心事を持ってCブロックを読み進めていくと、兄の家出に際し、肝心の経済上での問題がすっぽり欠落していることに気づく。三十二節で「自分らしく生きたい」、「よりよく生きる為め」の家出とされているだけなのだ。

直哉の場合どうであったか。のちの『くもり日』（昭

2・1「新潮」によると、その大森生活(大2・12)に入るに際し、父に「廃嫡をせま」り、「父も承知し」、「衣食に困らないだけの金を受け取」って「家を出た」とされる。

芳行の場合は直哉と同じようにはみられない。では芳行は空身で家を出たのか。そうとも断じ切れない。つまりその家出に関し、金銭面での説明がつかないのである。

何故このようなあいまい性が出たのか。私はその一因として、直哉には自身の家出のあり方に対する負目があったせいだと考える。時の経過をみれば隠していた過去も正しく語ろうとする姿勢が生じようが、少なくともこの作品の執筆時点では意識的な回避、隠匿の方向にあったと推測するのである。

これを逆に虚構の完成度という側面からみれば次のようにいえる。芳行は直哉の分身として存在する。が理論的にいって、虚構上の人物である限り、芳行はある必然性のもとに作者と別個の行動をとっていい。空身で家を出る、そういう勇氣ある家出として今ひとつ読者に伝わってこないところにこの作品の虚構化の脆弱さが認められるだろう。

次に、Cブロックにおける三つの小ブロックそれぞれの問題点について触れてみる。

赤城山での怪我をめぐる件(十八、十九、二十節)はどうか。これは、兄の小豆島生活(十月〜翌年三月)失敗後の六月のこととされる。直哉の大正二年八月の山の手線での交通事故体験に照応するエピソードである。

父は芳行の見舞いに出かけたい気持ちを持っていた。だが、それを「讓歩」もしくは「偽善」と考え、ついにはそれをなし得なかった。一方の兄もこれと同じような性質、癖を持っているとされる。それは小豆島行きに際しての「暇乞ひ」のシーン(九節)に確かめられる。そこでこのエピソードに窺える父子関係を要約すれば、お互いの性向からくるいわば不和の閉塞状況ということになるか。直接の衝突は起こらないが、それだけ厄介な段階にあるともいえるだろう。

怪我の件につづき、兄の「細君探し」の部分(二十一節〜二十七節前半)へと移る。小説の時間上、先のエピソードから半年ほどを経過している。だが直哉に即せば、交通事故以前の大正二年六月のことが主に素材となっている。

この「細君探し」の挿話は何を物語っているのか。ほぼ時を移さず二人の女性が兄の花嫁候補としてあがるが、いずれも父の反対で立ち消えとなった。父としては、自身の出した「先の家は私が選ぶ。その上で、其人

をとるとらないは芳行の自由に任せる」(二十六節)という条件に遵奉し、それに添ぐわなないから反対したまでにすぎない。父は息子に何ら妥協していかないのだ。一方の兄は、父にその運命を左右されながらも、また反対されても二度とも父に反抗の牙を直接向けなかった。ここには最早Bブロックにみられたような威勢のよさはない。父への妥協という姿勢すら認められるのである。

直哉の場合、そういう父親のいる(八家)への顧慮から、その自我を押しさえ付けるのは我慢ならぬとして「廃嫡」を申し出た。『范の犯罪』(大2・10「白樺」)は客観体の小説であるが、范のあの雄々しい自我貫徹の意志はこの時期の紛れもない直哉の内なる声であったろう。

縁談の拗れの直後、『或る男、其姉の死』は突如として姉あての兄の手紙を展開させる。この部分(二十七節後半～三十二節)は草稿「死ね〜」(大正3年10月18日執筆)を利用したものである。直哉としてはその家出後のものとなるが、果たしてその利用のあり方は当を得たものであったろうか。

「死ね〜」は、京都在任期の直哉が、「……お父さんは本統の所全くお前に愛はないと云ふてなざるさうだ。死ねばい〜と思つてなざるさうだ。……」というある叔母の言葉に触発され、父への憎悪を書きつけると

もに、一方でいまだ微かに残る父への肉親としての愛を吐露している。『或る男、其姉の死』の場合もこれと同じ趣で、本所の伯母さん(兄の実母の姉)の不注意な発言を発条として父への怒りをぶちまけ、同時にそれと反対の父への愛の所在も語っている。

だが、小説の場面設定上、この時点の芳行はいまだ父と同居中である。これだけの父への怒り、憎悪をよく抑制できたものだと思ふ。精神的によほどの強化がないとできないことと思ふのだ。

志賀の場合は、大森から松江(大山生活を含む)、京都と渡り歩き、その間に自我の沈静化、精神の鍛練を積んでいる。しかも父とは遠く隔てて住まっている。「死ね〜」の独語はそれなりに納得がゆくのだ。

以上のことから、直哉家出後の執筆にかかると「死ね〜」は、『或る男、其姉の死』という虚構世界にうまく対応する形で利用されていないとせざるを得ない。本来なら、この兄家出の場面は、小説の大きなクライマックスとなるべきところである。それが父との交渉を何ら語らず、一方的、飛躍的な家出へと辿る。しかも再三述べるように、ここに至って主人公の経済問題も尻窄みの観を呈している。「死ね〜」の嵌入はこの作品の大きなマイナス点といいたい。

Cブロック全体の結論としていかなることが言えるか。主人公の「自活」失敗に起因するとみられる自信喪失、気弱さなどは、その敵対する父への反抗心を弱め、さらには「家」への妥協という傾斜さえみせた。しかしそこからの脱却として自己再生を目指しての家出へと展開される。そのプロセスが多分に飛躍的と思われることから、虚構上での配慮に欠けるといわざるを得ない。が、ともあれ、このCブロックには、直哉の尾道生活以降の暗い生の意識が如実に反映されていると指摘できるのである。

(六)

さて、Aブロックの考察に入る段となった。どういう手順で論じるかといえは、やはり姉臨終のシーン形成のもととなった直哉の夢の記述から考察すべきであろう。

後年志賀は、座談会「作家の態度」(昭23・6、7)や対談「緑蔭閑談」(昭39・8)の席上で、「或る男、其姉の死」の「おしまいのほう」、すなわち姉臨終の場は、自身の見た夢を利用したと語っている。それは明治四十五年一月十三日の日記にある「明け方見た夢」を指す。ところがこの夢の内容をめぐるいくつかの異なった見解がみられる。それ故、敢えて長い引用を許されたい。

母が床の上に横はつてゐる、祖母が枕元にゐて、祖母はもう母が死むでゐると思つてゐるらしい。昌子に母の手を握らせやうとしたが冷めたくなつてゐる為めか、昌子は一寸さわると驚いて手を引いて英子の膝へ乗つて了つた。自分は母は未だ死にはしないと思ひながらジッと顔を見てゐる。……(略)……然しもう意識は失つてゐるに相違ない、と思つてゐると、母は不意に起き上つて何か云ひ出した。聴えないが手つきでこんな事ではないかと思つてゐると枕元の佐本の叔父にそれが聴きとれてゐて聴くとその通りだ。意味は死ぬ身で夜着などをよごすのは無駄な話だから何か悪い蒲団を此所へ敷いてくれ「門番所の子供の使つてる砂の入つた枕がいゝ」こんな事をいつた。そんな事が出来るものかと思ひながら自分は其所を然し気安めに(つまりそれを命じに行くフリをして)起つと便所から父が出て来るのに会ふ、それをいふと、「そんならさうしたらいゝだらう」と軽くいつた。……(略)……父の言葉は但し母の意志を重じて賛成したのではなく、母の左うしやうと思ふ動機に賛成したのである。……(略)……シゲに悪い夜着を命ずる。又其部屋へ行くと「本統に左ういひつけたかしら」と自分でフイと起つて命じに行かうとする、「因果な事だ」と思ふ、それ



がいつの間にか母でなくて祖母になつてゐる。……(略)……其内シゲが何か抱えて出て来る。「本統にいひつけたでせう」といふと祖母は承知した。帰りは祖母を抱いて来る。蚊帳がつつてあつた。ねかしてから足をもんでやる。其時急に戸外でワアといふ人声がする。大きな高張提灯を押し立てゝ出入の職人が多勢ゐる様子だ。「棟上げをしてゐるんですよ」と祖母に云つてきかした。自分が死ぬで人が集まつたと思ふと気の毒だと思つてゐる。

蚊帳の外には父などがある。とう／＼祖母も死ぬか祖母が死ぬれば自分の生活(精神上の)に大きい変化が屹度来る、とよくいつてゐたがいよ／＼其時が来たか。「祖母の為に」を書いたのも前兆だつたかしら、こんな事も思ふ。何にしろ、昨日あたりからの自分の生活が甚だ不充実だつたと思ふ。

以上のような夢の記述をめぐり、亀井雅司氏<sup>(9)</sup>および江種満子氏<sup>(10)</sup>はこの母を実母銀であると主張し、池内輝雄氏は義母浩説をとっている。しかし、私見によればこの母は一人に限定できないと思う。冒頭部で祖母や英子、昌子らに見守られる母は浩であり、次いで佐本(銀の実家の姓)の叔父に夜具を取り替えてくれるように言う母は銀であるとみたい。むろん夢後半での病床の人は

祖母留女である。だから厳密にいえば、夢の中での病人は上記三者を見立てるべきである。

そもそも夢の中では、例えばAならAという人物が次の瞬間にはBとなつてゐるということはいくらでも起こることである。その一例として志賀の初期の小品「イヅク川」(明44・2「白樺」)を引き合いにしてもいい。この小品は「美しい感じ」を残した夢をそのまま書き留めたものである。志賀は「会ひたい人」をたずね、イヅク川に赴くと、そこで「或知人」とすれ違つた。夢からさめた志賀は「知人は元、同じ学校に居た、海江田のやうでもあり、豊次のやうでもあつた。後から顔を出して笑つて居たのは確に豊次だつた。して見るとすれ違つた時は其人は海江田だつたらしい。」としてゐる。つまり、夢の中での「知人」は海江田から豊次にすりかわつたのである。これで病床の母が一人に限定できないことがある程度納得されたかと思ふ。

もっとも、この夢の中の母が浩から銀へ、そして祖母留女へと転換したことには、次のような背景を考慮すべきである。

直哉はちょうどこの夢を見た前後、『母の死と新しい母』(明45・2「朱櫻」)起稿は一月八日以前の「二人の母」脱稿は一月二十日)を執筆していた。この作品に描かれた

二人の母のイメージは、ともに夢の中の母と結びつく。直哉十三歳の折、生母銀は悪阻の余病のため息を引き取るが、そのさまはこの作品で詳しく描写された。銀が夢の中で病床の人として出現する公算は大である。一方、継母浩は明治四十五年一月五日に直哉の異母妹椋子を出産している。そしてこの作品で「母のお産は軽かつたが、後まで腹が痛んだ。」とされている。ここに浩もまた夢の中の病人になりやすいといえるのだ。

祖母が死の床にあるのは『祖母の為に』（明45・1「白樺」の影響である。今はあの作品に描かれたような苦しい病を克服しているとはいえず、高齢の祖母に死が迫っているという危機感直哉に常にあったと思う。

以上のように、明治四十五年一月十三日の夢の中に出現した病床の人は、上記三者の要素を分有していると解されるのである。

次の問題は、この夢が草稿「或る男と其姉の死」（大正3年2月15日執筆）を形成し、さらに『或る男、其姉の死』の姉臨終の場形成へと辿る過程である。以下これを中心に、定着された姉のイメージが作品全体に及ぼす意味についても考えてみたいと思う。

草稿「或る男と其姉の死」には語り手は存在しない。まず「或る男」の形象に注目すると、終始一貫してその

「憂鬱」さが強調されている。この男は姉の死に際しても泣かず、死せるが如き人物として出現し、そして立ち去っていった。

何故志賀はこのような男を造型したのか。自ら選んだとはいっても、 $\wedge$ 家 $\vee$ と断絶して生きる暗い生の意識、向後の父との関係に対する絶望感、さらには過去の記憶の一切すら抹消したいという思いなどを反映し、この「憂鬱」な男が形象化されたのだと思う。

では問題の姉の形象に視点を移してみよう。明治四十五年の夢を利用した姉臨終のシーンのあり方はどうか。

結論からいえば、この場の姉に先に示した三人の母（育ての母である祖母も含む）のうちある特定の人物にアクセントをつけて読むことは困難である。孫（夢では昌子）以下の注記も同じ要領である）が病人（浩）の手の冷めたさに驚き母（英子）の膝に逃れる場面、夜具を取り替えてくれるように申し出た病人（銀）に「そんなら、さうするといふ」と言って冷たく対処したその夫（直温）、そして葬式の知らせで集まっている人たちの物音を戸外に感じたらしい病人（祖母）に対し「今日納屋の棟上げださうですの」と言って機転をきかした娘（直哉）、それぞれ夢の記述に照応しながら姉臨終のシーンは形成されている。大別して三つになるそのどの場面が

特に重要だとはいえない。

夢自体が極めて陰湿、かつ印象深かったことから、いま書こうとする作品の素材になりやすかったまでのことと解したい。

重視すべきは、むしろ夢に依拠しない「湯灌」のシーンにあるだろう。作者は、今や「醜いアザ」としか見えない姉の左耳の下にある痣をもってその「変化」のすさまじさ、零落の身を強調させた。だからこの姉の過去、出自としての「A家」にこそ現在の不幸をもたらしたものがあると読めることになる。その点、池内氏がいうように「姉の死には『家』を捨てた者の運命が具現されている」と解される<sup>(12)</sup>。むろんこのことは定稿作についても同断である。

翻って、弟の暗さ、憂鬱さの由来を考えれば、姉の場合と同じだといえる。そしてこの草稿に関する限り、弟にも姉同様の運命が待ちうけていると<sup>(12)</sup>いい。その行く手には微かなる光明も見出せないのである。

定稿作における姉臨終のシーンの分析に移ろう。

まず、先の夢の記述のうち、夜具の件をめぐる第二のシーンのみが活用され、それに前後する二つのシーンが捨象もしくは後退していることに気づく。草稿で病人の孫とされていた四つぐらいの女の子はここでは「姑の方

の親類の児」となり、病人の手に触れることもない。また、病人への配慮を語った第三のシーンはほぼ完全にカットされた。そして「今死ぬのに客用の蒲団を汚してふのは勿体ないから」、「きたない蒲団」と「子供の汗疹あせもの時使った砂を入れた枕」とに替えてくれという病人の申し出をめぐる部分だけが残されたのである。

しかも姉の病気の原因については「悪阻から変化した余病のやうですが、はつきりした事はわかりません」とする叙述が新たに加わった。生母銀の死因は悪阻から変化した余病のためである(母の死と新しい母)。さらには、姉の死に際して泣かなかったその夫の姿は、實際上の銀臨終の場で泣かなかった直温と符合している(「暗夜行路」草稿27など)。

こうなると姉の形象は生母銀のイメージを下敷きにする<sup>(13)</sup>とみねばならない。ここに至って姉の形象は生母銀のイメージの仮象となる。

このような姉の造型から作者志賀の生母憧憬を説くまではひとまたぎで済む。桜井勝美氏は、志賀の生母憧憬を四十節の兄の「書捨てて置いた原稿の断片」から説いている<sup>(13)</sup>。ちなみにこれまた定稿作で新たに加わったものである。その内容を述べれば、中学時代の兄が、姉の耳の下にある「青味がかつた拇指の腹程の痣」を「ひどく

美しく」思い、物指しでそれに触れてみたい誘惑にかられ、ついには指の先でちよっとその痣に触れて逃げ去った、という思い出の一齣と言えよう。桜井氏は、実母銀の足のふくらはぎにあったという白い線(『白い線』昭31・3「世界」)の連想から、耳の下に美しい痣のある姉の形象を銀のイメージを借りたものとみたのである。

私もこの見解に同意する。がさらに別の観点から、その実母思慕を傍証してみたい。それは次のような作者の創作上のミスから指摘できる。

姉の痣にさわった出来事のあったのは姉が「嫁入つた年」のことであり、兄は当時「中学校に通」う「十四五」歳とされている。そこで、「二十歳の時に今の良人にかたづいた」(二節)という記述に照らし合わせてみると、姉弟の年齢差は五、六歳となる。しかるに、「十か十一の時に実母を失つた」姉(三節)という記述、および「八つで実母を失つた」兄(七節)という記述から、二人の年齢差を二、三歳とみてきたこれまでのものと矛盾することになるのだ。

姉弟の年齢差が広がることは、弟にとって姉は母性に近づくことを意味しよう。主人公の、ひいては作者自身の実母憧憬は、こういう細かいミスを伴う最終四十節の形成にはっきりと認められるのである。

以上のような事柄から、姉設定の意味づけとして、作者志賀における実母憧憬の無意識的な現れとすることができる。ただ私としては、その実母憧憬が初期から一貫して存在していたとするにしても、大正四年の赤城山生活以降に力点を置いて主張すべきだと考える。というのは、大正三年時と大正九年時との大きな落差を無視できないからである。『焚火』の素材となったKさんとその母との神秘的な愛の所在を見聞したのは赤城山時代のことであった。そのバリエーションとして『或る男、其姉の死』のプロローグ、姉弟の絆の確かさを語った部分の形成されたことは間違いない。また、定稿作では、姉の形象は実母銀の仮象だと明言できるまでに至っている。しかるに、草稿段階では、姉弟間のテレパシー発現が着想されていないばかりか、姉の形象に銀が関わる要素も極めて少ない。父との不和関係に煩う度合が強ければ強いほど、実母憧憬はその胸底に封じ込められたままだったとすべきであろう。

(七)

『或る男、其姉の死』で残された問題点は、A・B・C三ブロックの相互関連性についてである。父子不和を語ったB・Cブロックと、姉弟の交渉を中心にするAブ

ロックとは一見その関連性、連続性が捉えにくい。だが次のように解釈すれば、その構成の必然性がかめるように思う。

芳行は何故父との不和を深めていったか。性格上の問題、またその生育事情（祖父母に育てられた）などからも説明はつけられるが、その最大の原因はくり返し言うように、彼が「亡き母の幻影」を「父にまで求めてゐた」こと（七節）、父の愛を執拗に求めたところにあると思う。そして父の愛がとうとう得られず、また自己嫌悪に陥ったことから家出するに至った。だから、父との関係は不和のまま終るが、窮極的には、生母思慕が根本にあり、そして残されたものといえる。芳行は「ベツレヘムの星に導かれ」るようにして姉の居所へやって来た。姉はすでにみてきたように実は母性を帯びた存在となつてゐる。この神秘的な肉親愛を語つたプロローグは、B・Cブロックでの不幸なる父と子の物語をやらわける機能を担っていたといえよう。これは意識的な所作ではなからうが、父との不和を母との宥和によって均衡を計ろうとしたものとさえいえるのではあるまいか。

『和解』は父との不和が解けて和解に至るプロセスを語つたが、その際甚大な力を発揮したのは他ならぬ今は亡き実母銀であつた。父との和解の日が銀の二十三回忌

の日に当たつていたのである。仮構として父との不和の永續をいうにしても、実母銀の存在は直哉の心の支えとして生き続けていた。そのことを『或る男、其姉の死』は静かなトーンで奏でてゐるように思うのだ。

また、AブロックをCブロックからの連続性で考えれば、家出を敢行した芳行のその後のことが暗示されたといえる。九年ぶりに会つた兄は、「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」（三十七節）を獲得するに至つていた。ここに自己の生き方を全うしている者の頼もしさ、力強さが感取できる。今何を職業としてゐるのか、文学の仕事はどうなつたのか、といった穿鑿は最早いらぬことである。読者は語り手と同様、兄が無意義な生活をしていないことを確認できれば十分なのである。

志賀の父子対立は確かに家族、肉親愛という狭い範囲内での問題意識しか持ちえなかつた。しかし、そこには頑固で強い父親が存在し、子の直哉はそれに鍛えられ、その自我および文学を形成、練磨していったといえる。ここに志賀直哉という作家が負わされたある青春の重みが捉えられるのである。

(1) 注

川本彰「文学における『家』の社会学的考察(三)——志賀直哉における父と子——」(明治学院論叢、昭45・3)など。

(2)

進藤純孝『志賀直哉論』(新潮社、昭45・6)

(3)

池内輝雄「志賀直哉・父子対立の問題」(有精堂『一冊の講座・志賀直哉』、昭57・10、所収)

(4)

志賀は内村鑑三宅に通う(明33・7より)うち、小内薫と知り合い、彼の勧めでイブセンを読むようになったという(稲村雜誌、昭23・24)。なお本稿執筆にあたり、山室静訳『小さいエオルフ』(イブセン名作集、白水社、一九五六年十月、所収)を参照した。

(5)

紅野敏郎「志賀直哉『真鶴』の原型——未発表の未定稿『説小清兵衛』(梗概)をめぐる——」(高田瑞穂編『大正文学論』、有精堂、昭56・2、所収)、および

(6)

紅野敏郎編『鑑賞日本現代文学7 志賀直哉』(角川書店、昭56・5、収録)

(7)

須藤松雄『志賀直哉の文学』(桜楓社、増訂新版、昭51・6)

(8)

拙稿「志賀直哉——尾道行前後の生活と文学——」(明治大学文学部紀要「文芸研究」第四十三号、昭55・3)

(9)

亀井雅司「『或る男・其姉の死』の問題」(『女子大國文』53、昭44・5)

(10)

江種満子「『或る男、其姉の死』試論——姉の存在をめぐる——」(有精堂『一冊の講座・志賀直哉』、昭57・10、所収)

(11)

池内輝雄「志賀直哉『或る男、其姉の死』論」(大妻女子大文学部紀要第四号、昭47・3)

(12)

注(11)に同。  
桜井勝美『志賀直哉の原像』(宝文館出版、昭51・12)